

No. 985

水俣からの告発

亀裂に消える怨念

自主交渉の患者家族が「東京乞食になり下がっても、の決意で東京丸の内チッソ（株）本社前に座り込みをはじめから1年以上歳月が過ぎた。これまでに何百回となく発言してきたであろうか。

企業責任を。会社は、頭を下げて、いまだあやまちを認めようとはしない。はじめて患者が発生してからすでに20年近くにもなるというのに、新認定患者の自主交渉をはばむ壁は厚かった。その壁は今も大きく立ちはだかる。1月、鉄格子の外で患者は訴え続けた。2月初代大石環境庁長官の仲たちではじめて会社側首脳と交渉をもつことはできた。待ちに待った日であった。しかし、社長は昭和45年、一任派の患者家族が第三者機関補償処理委員会との和解成立をたてに、それと同じ額の補償をいう言葉をくり返した。

「皆さん満足しておられるわけで……。」「社長！」

水俣市茂堂。きれいな入江を囲む110戸あまりの小さな漁村だ。淵上一二枝ちゃん（15歳）彼女もまた、生れた時から人形のような胎児性患者。家庭の事情で、裁判派から去年一任派にうつり、ランクづけに基き1時金180万円、年金28万円を受けとった。

今、彼女をひきとって面倒をみる宮内さんは「不安はかくせない。私達がいなくなったら誰が面倒をみるのか。100万円足らずで……。」と語る。かってチッソ工場につとめた宮内さんも、また認定申請中の患者だ。

110戸足らずの茂堂に、未認定も含めて117名の患者がいるという。一任に、患者が託す願いは、とりもなおさず、公害対策や患者救済の国に対する痛烈な問いかけでもあった。

国は環境庁を設けた。初代大石長官は、2月下旬、水俣を訪れた。長官の眼にうつるもの耳にするもの全くこれまでに真剣に取り組まない国の責任をせまっていた。

昭和7年、アセトアルデヒドの生産開始以来実に34年間も水銀を水俣湾に流しつづけた結果は、悲惨をはるかに超えていた。10月6日の認定は、汚染地域外の天草にまで及んでいた。天草御所の浦。ここに住む元漁師森正義さん（65歳）。10年前発病以来全ての患者がたどったように舟を売り、職を変え、そしてついに働けない体となった。同じ御所の浦に住む藤野レイさん。昭和35年の検診で、彼女の毛髪から650ppmもの多量の水銀が発見されているながら、今も未認定だ。「よう歩けん人前でころんだりしてはすかしか……。」

放置されつづけた裏側に、許されてはならない事が許されてきた歴史の事実が浮きぼりになる。汚染は拡がりつづけ、申請中の患者だけでも400人は超えるという。師走もせまった12月、選挙で湧く日本。候補者も訪れない遠い島で患者は耐える。

田中総理大臣は街頭演説で呼びかけた。

「近代日本の成立から100年あまりにかように日本は発展した。周囲にはまだ多くの問題を抱えているものの、しかし日本は永久に発展しなければならぬのです。日本国民のたゆまない努力……政治は国民のもの……。」その日本の発展のひずみの中で犠牲となった患者家族の声なき声はむくわれる事なくひずみが生んだ亀裂の中へ消えていってしまうのか。

「今の日本のしくみを支えている柱の一本でも倒せたらなあと思う。」

—新認定患者川本輝夫—